文庫オリジナル 傑作小説集

彼方(かなた)へ

薄井ゆうじ YUJI USUI

KOBUNSHA BUNKO

光文社文庫

文庫オリジナル／傑作小説集
彼方へ
著者　薄井ゆうじ

2005年12月20日　初版1刷発行

発行者　篠原睦子
印刷　萩原印刷
製本　関川製本

発行所　株式会社 光文社
〒112-8011　東京都文京区音羽1-16-6
電話 (03)5395-8149　編集部
8114　販売部
8125　業務部

© Yūji Usui 2005

落丁本・乱丁本は業務部にご連絡くだされば、お取替えいたします。
ISBN4-334-73989-X　Printed in Japan

Ⓡ本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

光文社文庫

文庫オリジナル／傑作小説集

彼方（かなた）へ

薄井ゆうじ

光　文　社

目次

無限ホテル 5
トンボロ 37
桜子さんがコロンダ 81
おしょうしい午後の陽 111
エイラット症候群 147
環状列石 171
酒粥 221
自転車を漕ぐとき 245
解説 佐藤哲也 276

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

無限ホテル

その手紙が届いたのは、父の仮の命日の、三日前のことだった。

不意の手紙だった。手紙に限らず電話にしても来客にしても、なぜこうも不意なのか。

父からの手紙かと思った。いつも私は小さく期待している。手紙、電話、ドアのチャイム。そうしたものが、父が帰宅する予告ではないかという期待を私に抱かせつづける。十二年間、期待は裏切られてきた。もう望むまい、父は失踪したのではなく死んだのだと私は自分に言い聞かせ、そう決心した日を、特に何の意味もなく父の仮の命日とした。

私のなかの父は消去された。しかし電話や手紙に対する小さな期待は去らず、父が使っていたしつこい香りのする安物の整髪料のように、私の心に染みついたままになっている。

私は父の帰宅を心から望んでいるかというと、そういうわけでもない。幼いとき母は亡くなり、父と私は二人だけの生活をつづけた。私が学業を終えると、父と私は同じ屋根の下に住みながら互いに独立した生活を送るようになった。別々の部屋、自分専用の玄関。バスル

ームやトイレも別個に増築し、父とまったく顔を合わせない日も少なくなかった。家のなかで一か所、キッチンだけは共通だが、そこで父を見かけることは、ほとんどなかった。父は自分で料理をつくらずピザなどの宅配に頼っていたし、飲料水やビールを入れるための冷蔵庫は自分の部屋に、もう一つ持っていた。

電話回線もそれぞれ専用のものを引いていたので、父に用事があるときは電話をかければよかった。といっても、ことさら用事があるわけではない。一か月以上連絡を取り合わないこともあった。だから十二年前の夏、父の気配が消えたことに気がついたのは失踪してから何日目だったのか、詳しいことはわからない。

私はその日届いた手紙を、父からではないかという予感とともに、小さな期待を意識的に消去しながら開封した。差出人の名はない。しかも開封して文面を読む直前に、私宛てではないことに気がついた。父への手紙だった。

この十二年間、父に届いた郵便物は、銀行や保険や税金などに関するものは開封して処理した。処理とは、父がそうするであろうように、支払いすべきものは支払い、解約すべきものは解約し、更新すべきものは更新した。つまり私は父の命日まで決めたにもかかわらず、父がさも生きているかのように、その代行を務めてきた。

郵便物のなかで私信と思われるものは、一切開封しなかった。いつ父が帰ってもいいよう

に、届いた年月の順に父の机の上に整理しておいた。年々、父への私信は減り、この五年ほどは一通も届かなかった。ついでにいえば、解約していない父の電話も、一度も鳴らなかった。

そんなわけで私は悪意ではなく過失で、父への私信を開封してしまった。読むべきではなかったのかもしれない。しかし私の手は便箋をひらき、封筒から床にこぼれ落ちた地図を手にしていた。

『星降る八月一日の夜、お待ちしております』

便箋には、そう書いてあった。同封されていた地図は稚拙な手描きで、片隅には震えるような小さな文字で、ホテルの名と所在地が記されていた。

差出人は父ではないかと疑った。だが父が、自分宛てに手紙を書くだろうか。いずれにしてもそこへ行けば父に、あるいは父の所在の手掛かりを知る人物に会えるのではないかと思った。

なぜ父を捜そうとしているかは、わからなかった。

八月一日の午後、私は林の道を歩いていた。

あらかじめホテルに予約を入れようとしたが、どんな検索をしてもそのホテル名は見当た

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

らず、電話番号はわからなかった。行ってみて、満室であれば宿泊客の顔ぶれを眺め、父にたどり着けそうもなかったら食事でもして帰ればいい。そう思って出掛けてきた。

駅前でタクシーに乗ろうとしたが、運転手はそのホテルの名も場所も知らないという。しかたなく所在地を頼りにバスに乗り、林近くのひっそりとしたバス停で降り、ひどく曖昧な地図をたどりながら歩いた。やがて林は森になり、ついさっきまで取り囲まれていた文明の気配は、かき消えた。

森の先にホテルがあると地図には記されている。歩きながら私は、この地図を信用していない自分に気がついた。地図も、あの手紙も。それなのに歩きつづけているのは、父にたどり着くためには非常に困難で面妖な手続きが必要で、これはその一環なのだと感じたからだった。

時計が午後の二時をまわったころ森を抜けてホテルが見えた。海に向かって歩いてきたようで、三階建てのホテルの建物の背後に海が広がっていた。広いロビーの空気はひんやりとして、フロントに人影はなかった。ここに至ってもまだ、文明や人の気配は消えたままだった。ホテル入口にはレストランやバーやラウンジの案内が出ていたにもかかわらず、ホテルそのものの持つべき気配が感じられなかった。

私はカウンターの上の呼び鈴を一度だけ押した。誰かを呼び出そうとするより、自分自身

がここにいることを確認するための音だというように呼び鈴は低く一度鳴って、あたりはまたひっそりとした空気に包まれた。

海側の窓から、クルーザーが出航していくのが見えた。船はこのホテルのものらしく、カウンターの上に同じ形の船の写真が入った、クルージングのご案内、というスタンド式のPOPが置いてある。船に人影は見えないが、バスを降りてからここへ至るまでに見た、はじめての人がいるという気配だった。

長い時間待って、もう一度呼び鈴を押した。そうする以外、私にできることはないのだと思った。歩きまわってレストランやバーやラウンジを覗きこんでもよかった。そこで誰かに出会うかもしれない。しかし私は呼び鈴にすがった。さっきは自分を確認するための呼び鈴。そしてこんどは父を呼び出そうとする音だった。

しかしすぐにまた静寂があたりを支配した。さっき出航したクルーザーはもうずいぶん小さくなって、それが人の気配そのものを持ち去ってしまうように感じた。やがて船は小さく彼方に消えた。

三度目の呼び鈴を押そうとカウンターの上に手を伸ばしたとき、奥の小さなドアがひらいて、フロント係の男が現れた。不意の出現にためらって私は、自分が言うべき言葉を忘れてどぎまぎした。永遠に人など現れないだろうと、どこかで覚悟を決めはじめていたからだ。

宿泊したいが部屋は空いているか。予約していないけど泊まれるか。その科白を思いついて言語化し、声に出そうとしたとき、フロント係が慇懃な声で言った。

「お帰りなさいませ」

ルームキーを私の目の前のカウンターに、ちゃらりと置いた。彼は私の顔を一瞬見ると静かな微笑を口元に浮かべ、一礼してさっきのドアのむこうへ消えた。

取り残されて、私は閉まったドアと目の前のキーとを見詰めた。

いま、あの男は何と言った？　お帰りなさい。民宿や山小屋の主なら、はじめての客にもそんな挨拶を投げることはあるだろうが、レストランやバーを備えたリゾートホテルだ。お帰りなさい、と言うはずはない。まるで私が長期滞在者であり、私の顔をよく知っているとでもいうように、フロント係の男は躊躇なくルームキーを取り出した。そうしろと、誰かに指示されたのだろうか。であれば指示した誰かは、私が今日、ここに来ることをどんな方法で予測したのか。

ルームキーを手に取った。３３８。エレベーターを使わず、階段から三階へ昇った。３３８号室の前に立ち、すこし迷ってからドアをノックした。ノックしたあとすぐ、もし誰かが在室していたら、私はここに立っている理由を何と言えばいいのか戸惑った。いろいろな言い訳を思いついたが、それを使用する必要はなさそうだった。

何の返事もなかった。ルームキーを差しこみ、部屋のドアを開けた。開けながら、ベッドで誰かが眠っていた場合はどうすればいいのか、と自分に問うた。私はことがはじまったあとになってから後悔し、その後どうすればいいのかを考える性質なのだと気付き、その性格を直すにはどうすればいいのかと考えながら、そんなことをいま考えてもしかたがないではないかと自分を戒めたときにはもう、部屋のなかに入っていた。

幸い、ベッドには誰もいなかった。バスルームにもバルコニーにも、人の気配はなかった。

ここは、私の部屋なのだ。

そういう思いが、ひたひたと押し寄せてきた。

あのフロントマンが、どんな勘違いをしたにせよ、ここは私が今夜一泊するための私の部屋なのだという満足感のようなものに包まれながら、私はバルコニーのすぐ足元に見える美しい砂浜と、そのむこうに広がる海原（うなばら）とを眺めた。

お帰りなさい。

あの男の言葉に誘引されたわけではないが、私はかつてここに滞在したことがあるような懐かしい気持になっていた。もちろん、はじめて訪れたホテルだ。幼児のころ父に、あるいはまだ生きていた母に連れられてここに来て、その記憶をなくしているだけかもしれないが、すくなくとも私のなかに、ここへ来たという記憶はない。

三十分ほど、海をぼんやりと眺めていた。持ってきたバッグをひらかなかったのは、キーを間違えて渡したからフロントに戻って欲しいと、いつ内線電話がかかってくるかわからなかったからだ。そうしてもいいだろうと思う充分な時間が経過するのを待ってから、私は上着を脱いでクローゼットにかけ、短靴をスリッパに履き替え、バッグを開けて大きな机にノートパソコンをセットした。

ここへ来たのは仕事をするためではないが、大きめの机や快適な空間、そして爽やかな景色を見ているうちに、ここで仕事をしてもいいという気持になっていた。気に入れば何日か滞在して、一気に仕事を片付けてしまう手もある。

もしかしたら、という思いもあった。あまりにも出来すぎている。仕組まれている。私は一か月ほど前、ある小説を執筆する依頼を受けていた。海辺のリゾートホテルで起きる奇妙な出来事をテーマに、短編小説を書いてくれないかという依頼だった。引き受けたものの、ほとんど構想が湧かないまま悶々としていたころ、あの手紙が届き、ここへ私を呼び寄せたのだ。

ということは、もしかしたら悪戯っ気のある編集者が私の執筆の手助けをしようと、この部屋を用意したのかもしれない。であれば、さっきのフロントマンの対応も腑に落ちないことはない。手紙の宛先が父の名であったことが解せないが、編集者が複雑な仕掛けを組ん

だと考えたほうが納得がいく。

ということは、私はここに漫然と滞在しているわけにもいくまい。たとえかたちだけでも執筆する態勢をつくっておかなければ、突然部屋に編集者が訪ねてきた場合、説明がつかない。私はノートパソコンを起動して、とりあえず題名だけでも決めてしまおうとした。

『部屋の仕組み』

三十分かかって、やっと思いついたのが、この頼りない題名だった。一行目、

『その手紙が届いたのは、父の仮の命日の』

と書きかけたところで部屋にノックがあった。ほらきた、と思った。やはり編集者がここを予約しておいて、様子を見に来たのだろう。私はたったいままで熱心に仕事をしていたことがわかるように――事実そうなのだが――ノートパソコンを広げたまま、ドアのところへ行った。

ドアスコープを覗くと、一人の男が立っていた。知った顔ではなかった。魚眼レンズのために顔が歪(ゆが)んで見えているにせよ、すくなくともいまかかえている仕事を依頼した編集者の顔ではなかった。ホテルの従業員らしい服装でもない。かといって、客室に押し入ろうとする凶悪な犯罪人のようにも見えなかった。

レンズのむこうの男は片手をこちらに伸ばす仕草をし、もう一度ノックの音がした。一呼

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com